グリーンロード商店街（群馬県大泉町）

１．取り組みの概要

同商店街のある群馬県邑楽郡大泉町は総人口に占める外国人比率が日本一の町として知られている。グリーンロード商店街には外国人が経営する店舗も多く、商店街では街路灯の整備や期間限定のイルミネーションを行っている。また、商店街の副会長は、商工会と連携して商店街活動を超えたまちづくり活動を行っており、大型店やロードサイド店による商店街の衰退や製造業従業員の減少といった厳しい環境を乗り越えようと、地域ぐるみの活動が続いている。

２．商店街概要

商店街名	グリーンロード商店街
所在地	群馬県邑楽郡大泉町坂田 5-4-3
組合員（会員）数	54 名
URL	―

注）同商店街は任意団体。

グリーンロード商店街

外国人が経営する店舗の外観

３．取り組みに至る経緯・背景

人口 41,286 人（平成 22 年 3 月末）の大泉町を取り巻く経済環境は極めて厳しい。地域住民に小売サービス等を提供している商店街にとっては、人口こそ横ばいの状況にしても、大型店やロードサイド出店の影響や製造業のリストラの影響を強く受けている。

町の基幹産業である工業は、市内に三洋電機、富士重工業、凸版印刷、味の素冷凍食品等の大規模事業所が立地しているが、平成 20 年工業統計によると、事業所数、従業者数、製造品出荷額等とも 10 年間で減少しており、従業員数では 4,515 人の減少となっている。また、商業は、平成 19 年商業統計によると、小売業では商店数、従業者数、年間商品販売額とも平成 11 年と比較して、いずれも減少しており、商店数では 82 店舗の減少になっている。

このような状況のなかで、商店街も衰退し、目立った商店街活動は行われておらず、組合を解散した商店街もみられる。しかし、同商店街のみならず外国人が自ら店舗経営に乗り出し、同商店街では 11 店舗が外国人経営の店舗となっており、特色ある商店街を形成している。

外国人が経営する店舗内部（雑貨店）

外国人が経営する店舗内部（肉店）

４．取り組み内容

同商店街の会員は 54 店舗でうち外国人が経営する店舗は 11 店舗となっている。外国人が商店街で店舗経営を行うようになったのは、不動産業者を通じて物件の紹介を受け自力で開店したものであり、商店街として特にそれを支援した訳ではない。しかし、同じ商店街にあってイベントで協力し合うなどの関係にはある。また、同商店街が面している道路は、町が電線地中化やカラー舗装、植樹を行ったもので、同商店街としては、街路灯の整備を行うとともに冬場のイルミネーションを行っている。

街路灯については、老朽化してきたため、外国をイメージする十文字でカラフルな街路灯を整備することになったほか、イルミネーションでは電球の LED 化を進めた。

しかし、同商店街のみならず大泉町を取り巻く環境は厳しく、町としての取り組みが期

待されていた。

そうしたなか、大泉町観光協会は大泉町商工会と連携して、サンバ部会（会長は商工会副会長）、シモン部会（会長は商工会理事）、郷土文化部会（会長は商工会理事）を設置し、地域資源を活かした活性化の取り組みを始めた。サンバ部会は、年１回のサンバコンテストの企画・運営を行っており、今年の 9 月 11 日には、浅草からサンバチームを招待して実施した。

また、シモン部会では、昭和 47 年に原産地のブラジルより持ち込まれた白いサツマイモ「シモン芋」の健康を利する機能に着目し、平成 17 年から農家と連携して「シモン芋」の栽培を委託し、シモン芋焼酎とシモン茶の開発・販売を行っている。「シモン芋」は、ビタミンやミネラルが豊富で、葉や茎にもポリフェノールなどの栄養分が含まれており、高血圧・糖尿病・便秘など、多くの効能があるほか、ダイエットのサポートにもなるとして注目を集めている。シモン芋焼酎は、千曲錦酒造（株）に製造を委託し、アルコール度数 25%、容量 720ｍｌの「城のうち」として、町内の酒店を中心に販売されている。

また、シモン茶は、抹茶の２倍以上のビタミンＫを含むシモンの葉を活かした健康茶（１袋 500 円、内容量 30ｇ）して販売されている。

郷土文化部会では、平成 19 年 6 月に「おおいずみの四季」と題した、大泉の地域資源を紹介したガイドブックを発行するとともに、大泉町内の工場を観光資源として捉えた産業観光ツアーを企画・運営している。

一方、大泉商工会でも、平成 19 年度に「大泉町食べ歩きマップ 2008」の発行や毎年、産業まつりを開催するなど、活性化への取り組みが行われている。

同商店街の副会長は、こうした観光協会や商工会の活性化活動にも積極的に企画段階から参画し、商店街の活性化を超えて、町の活性化を進めるなかで商店街の活性化にも結び付けたいと考えている。

５．取り組みによる成果

(1) 成果

同商店街における商店街事業は、ハード事業のみであり、それだけでは取り組みの効果が確認されていない。しかし、群馬県が毎年実施している観光統計によると、平成 21 年度の大泉町の観光入込客数は 223,500 人で、直近の３年間でみると、平成 19 年度 209,000 人、平成 20 年度 210,000 人と増加傾向にあり、観光協会と商工会との連携による３部会の取り組みの成果が伺えるとともに、それが商店街での販売機会を増やすことにも結びついている。

(2) ポイントや工夫

このような成果をもたらしたポイントや取り組み上の工夫として、以下の点をあげることができる。

- 大型店の郊外立地、ロードサイド店の集積が進むなかで、大泉町観光協会は大泉町商工会と連携して、サンバ部会、シモン部会、郷土文化部会を立ち上げ、地域を挙げての取り組みを行っている。これらの取り組みに、商店街の将来に危機感を感じている副会長も参加し、積極的な活動を行っている。
- 副会長は、シモン部会で開発したシモン茶を店舗に置くよう、働きかけている。

６．今後の課題と展望

(1) 今後の課題

前述のように、大泉町の場合、一商店街の活性化努力では活性化が難しく、町全体で地域資源を活用した取り組みが行われている。しかし、大泉町を取り巻く商工業をはじめとした経済環境は極めて厳しく、数々のイベントや地場産品開発をどう町の活性化、さらには商店街の活性化に結び付けていくのかが大きな課題となっている。

同商店街の副会長は、大型店では提供できない、安売品でない手間をかけた物やサービスをつくって提供するのが、個店の生き残るべき道と信じているが、それを商店街として如何に展開できるのかも課題となっている。

副会長によると、外国人経営者は、他人の力を借りずに自ら勉強し、がむしゃらに働き、何とか経営を続けているのに対して、日本人経営者は経営意欲が弱いと指摘している。

(2) 今後の展望

同商店街の現状は、我が国の大方の商店街の実態を反映しているものと思われ、商店街の活性化に向けては、社会経済構造の変革が必要である。しかし、商売の基本である大型店との差別化の方向について、手づくり商品を作って売ることが重要と話す副会長からは長年、商売を続けてきた信念を感じ取ることができる。また、観光協会や商工会の仲間達との活性化の取り組みが、一過性のイベントを乗り越えることができれば、活性化に結び

つくことも不可能ではない。「外国人比率日本一」という特徴を、外国人とともにブランド化していくことができれば、人にやさしい商店街としての姿に近づくことができるかも知れない。

ちなみに、平成 13 年（平成 13 年）５月、日本国内の外国人が多く住む街の自治体などが集まり、外国人住民が多数居住する都市の行政と地域の国際交流協会のために「外国人集住都市会議」が組織されている。同会議は２年置きに持ち回りで座長都市を置くこととし、平成 21 年～23 年度は大泉町の隣の太田市が座長都市を務め、「おおた 2009 緊急提言」等をまとめ公表しており、外国人集住都市のあり方には商店街も無縁ではない。